沖縄タイムス　2022年（令和4年）11月6日日曜日

随想

病と闘い 生きる喜びを

ピアニスト「ブーニン」

田幸正邦

先日、NHKBSの番組で、ピアニスト・ブーニンのドキュメンタリーの中に、9年ぶりのリサイタルが含まれていた。彼は1型糖尿病を発症して治療に専念し、見事によみがえった。食事制限の中で、体力が次第に衰退し、ピアノに向かう気力をも奪う病である。

スタニスラフ・ブーニンは1966年にモスクワで生まれた。4歳から母親の下で学び、ロン＝ティボー国際コンクール（83年）とショパンコンクール（85年）で優勝した。

歯切れの良い演奏に、日本中が沸いた記憶がある。しかし、88年ドイツ、ボンに亡命する。その後、日本を度々訪問して若者を励まし、地震や津波の被災地で、チャリティーコンサートを開催して元気づけた。滞在する中で、ジャーナリストの日本人に熱烈に恋して結婚している。

一人息子にピアノを指導したが、次第にジャズに傾倒し、現在スイスの大学で量子物理学を専攻しているという。おそらく、アインシュタインが学び教鞭をとったチューリヒ工科大学であろう。彼は第2のマックス・プランク（量子力学の端緒を開く、ピアニスト）やアインシュタインを目指している。

6月に八ケ岳ホールで開催された演奏会は、病と闘いながらこぎ着けたものである。

左足のアキレス腱を切除した結果、短くなり、それを補うために靴底を上げて歩く姿は痛々しく、細い体が左右前後に揺れるのをつえで支えていた。

ブーニンの演奏法は理想に近い。肘を垂直に下げ、それから指先までほぼ直角の姿勢で弾く音色は、はじけて振動し、天から舞い降りる天使の声に聞こえる。彼の演奏を見て、名ピアニストのヴィルヘルム・バックハウスを思い出す。私は、彼が最も理想的な奏法を確立したと、評価する。

ブーニンはシューマンの作品を演奏した。厳かな雰囲気を醸し出し、私たちに「共に頑張ろう！」と語りかけていた。そこは彼自身が到達した「悟り」の世界である。しかし、練習不足の影響で、本来の真珠のように温かくて輝きのある響きに戻っていない。将来に期待したい。

彼はこれからも病と闘う運命にある。それはまさしくベートーベンと一致する。ベートーベンが病に打ち勝つことができたのは、音楽とある女性への愛があったからである。

ブーニンはこれまでベートーベンの多くの作品を演奏した。その経験が奮い立たせ、私たちに生きる喜びと力を与えてくれる日を待ち望んでいる。

（沖縄市、沖縄ベートーベン協会会長、75歳）